

青い目の非行少年見てある記

竹本 靖 秀

>>> 貧富の差 <<<

アメリカ滞在6日目の朝は、ロスアンゼルス市内にあるYMCAホテルの一室で目をさました。暑い、まったく暑い。全身はシャワーを浴びたような汗でビッシヨリ。おまけに頭が少し重く、ガングンする。

「アメリカは大陸性気候やから汗なんかかけへん。カラリとしているで……」と、日本出発前、ご親切にわざわざ教えてくれた知人の声が、妙に耳に残っていた。時計を見ると午前10時半、7月半ばの「真夏の太陽」はすでに昇りきり、その強い光線は、窓の隙間から容赦なく入り込み、ベッドの中の温度を上げていたのである。

アメリカ到着以来、朝寝坊の連続だ。

朝昼兼用の食事は、セルフサービスの店「カフェテリア」で食べることにした。全米いたるところにあるこの店は、私のような貧乏旅行者にとつてはこの上もないお気に入りだ。

チップの心配もいらず、横文字のメニューに頭をひねることもなく、ただお盆をもつて歩き回り目の前に並べられている料理のうち好きなものだけをとり、そしてレジでお金を払つてから自分でテーブルまで運ぶのである。

ベーコン3切れと目玉焼き、それにパンとミルクで1ドル20セント。ひやあー高い。

日本でならいくらばられても150円位なのに……と思いながらそれでも腹がふくれてくると値段のことなどすっかり忘れ、裏街を歩いてみようと思つて店を出た。

ロスアンゼルス市は、新旧がはつきりしている。市役所を中心とした一帯にはすばらしい高層ビルが建ち並び、郊外から集まつた10数本のハイウェイは、見事な立体交差を見せている。こうした近代的な都市を誇示しながら、一方では黒く汚れた古いビル群が、また一つの都市を形づくっているのである。

そうした古いビル群の街角には、タバコをふかしたりホットドッグを立ち食いする労働者風の黒人達が多数たむろしている。彼らの服装はみすばらしく、ただぼんやりと道行く人を眺めている。私などがその前を通ると、まるで人気俳優を見るかのように、熱つばい目つきで見ている。

このアメリカに来る途中、船に乗っていたアメリカ人から「アメリカは階級差のない自由な国だ」と、よく聞かされてきた。

しかし一歩アメリカの土を踏んで、まず目に入つたのは貧富の差であつた。物質文明を誇るこの国にも、その物質に恵まれず、その日その日の生活に追われる人達が、想像以上に存在していたのだつた。最初訪れたサンフランシスコの街でも貧富の差が非常に感じられたが、このロスアンゼルスに来て、その色がますます濃くなつてきた。

ぶらりと市の中央部にある公園へ行つてみた。昼下りの公園は人、人……でいっぱいだつた。白人や黒人、黄色人種など多種多様で、まるで人種の展覧会がはじまつたような錯覚がおこる。

チェスを楽しむ老人、立派な服装をした中年の夫婦、携帯ラジオを囲み、流れる音楽に拍子を取りながら歌っている黒人のグループなど、のどかな

姿があちこちで見受けられる。

しかし、こうした健全な場面ばかりではなかった。破れた運動靴をはきベンチにぼんやり座っているルンペンの姿や、ウイスキーの瓶をころがして酔っぱらって寝ころんでいる男もいたところに見られた。私はその公園の前に来たとき、異様な雰囲気を感じ、一瞬立入ることをためらった。それでも10分程眺めていると、ふと頭に「天王寺公園」が浮かんできた。国こそ違え、ルンペンなど寝ころんでいるところは天王寺公園と大差ない……と思うと急に不安が消え去り、足は公園の中へ向いた。

噴水の横には80名位の黒人の集団が目映った。何やら演説らしいものを聞いていた。興味がわいてきたのでその黒人達の脇を抜け、前の方に出た。2m級の黒人の中に入ると、私など押しつぶされそうになるほど、チツボケになる。ブーンと、黒人独特の体臭が鼻につく。眼鏡をかけ背広をキチンと着こなしたほつそりした黒人が、さかんに熱弁をふるっている。

一生懸命聞いてみたが私の語学力ではさっぱり分らない。「ブラック」「ブラック」という単語がたまに聞こえるので、黒人差別問題を言ってるらしかった。

》》 靴みがき少年 《《

少しつかれてきたので、空いているベンチに座った。炎天下で暑かったが、隣に座っているバアさんが平気な顔をしていたので、私も汗をふきながら、しばらく休むことにした。

そこで気がついたのであるが、ベンチの周りには、たくさんの靴みがき少年がいた。そしてベンチに座っている人達に「靴をみがこう、靴をみがこう」としつこくつきまとっていた。

日本でも最近、靴みがきの少年の姿をほとんど見かけない。その日本より金持ちの国アメリカにまた福祉国家であるアメリカに、このような貧しい少年が余りにも多いので意外に思った。

左側に座っていた、頭の禿げあがつた50がらみの男の前に一人の少年が近づき、靴をみがきだした。私はその様子を写真に撮りたいと思い、ナツザツクからカメラを取り出し、早速シャッターを切った。わずか2mほどしか離れていない距離だったので、その少年はシャッターの音でふり向いた。そして靴をみがく手を休めずに「ビーツ」と口ぶえを吹き、近くにいる仲間に合図した。

集まってきたのは4人、そのうち3人が黒人でもう1人は白人と黒人の混血児らしい。全員、手には靴みがきの道具をもっていた。靴をのせる台の中に靴クリームやブラシが入っており、日本で見るのと変わらない。みがき台は万国共通らしい。

口ぶえを吹いた少年は、さかんに私を指さして集まってきた4人の少年に何やら喋っている。気持悪くなつたが、こんなところでコソコソ逃げるようでは日本男子の沽券にかかわると思い、じつくり落ちつくことにした。

そのうちに4人組が私の前に立ち、ジーパンに薄汚れた黄色のボロシヤツを着た少年が「靴をみがこう」と言つた。どうやら写真を撮らせたくわりに靴をみがかせろ、という意味らしい。これも話のタネだと思い、みがき台の上に左足をのせてやつた。そのボロシヤツの少年は地べたに座り込み、思ったより丁寧に磨きだした。

約5分、磨き終つた少年は「ワン・ダーラー」とゼスチュアまじりに1ドルを請求するのだつた。いくら物価の高いアメリカでも1ドルはちよつとペラボウだと思い「1ドルはダメ、50セントだ」と言いながら、少年の手の中に50セント銀貨を握らした。すると周りにいた少年達が一斉に、ガ

アーガー喚きだした。余りうるさいので「あほんだらあ、むこうへ行きやがれ！」と大阪弁でどなつた。

さすがに少年達もびつくりした様子、きよんととして立つていた。諦めたのか私が立ち上がつて歩き出しても、後をつけて来なかつた。そういえば公園のアチコチで、少年達が客を取りまいて、ワイワイさわいでいるのを何度か目撃した。

街の盛り場に行つても、10歳前後の少年が多数徘徊していた。そしてガンコーナーや立食いのホットドッグ屋の前には、いつも黒山にたかつていた。ガンコーナーでは、ゲーム台をガタガタさせて、ガラスを割っている少年もいた。店のおやじが青すじを立てて、その少年を追いかけている。路上では旅行者風の通行人にお金をせびっている。

>>> いない愚連隊 <<<

ではハイティーンの生態は、一体どうなっているのだろうか。夜の盛り場を歩いてみた。浅草や千日前で見かけるような愚連隊風のアンちゃんとはほとんど見当たらない。バーをのぞいてみても未成年者らしきものは見かけない。非行少年の先進国だから、さぞかしアンちゃんが多いだろうと意気込んで来ただけに、いささか気合いが抜けてしまった。

YMCAの人やバスの中で聞いてみると、そのようなハイティーンは盛り場に集まらないという。最近アメリカの各州で、未成年者の飲酒取り締まりが特にきびしくなってきたらしい。未成年者と知つていながら酒を提供すると、その保護者はもちろんのこと、業者までたつぷり罰金をしぼりとられる。日本であれば年令ぐらゐ簡単に偽ることができるが、アメリカではそうはいかない。かならず年令証明を見せろといわれる。未成年者でも

年令を明記した身分証明書か運転免許証を携行することが常識とされているからである。

だから彼らは取り締まりのうるさい盛り場をさけて、人気の少ない場所へ行く。公園を散歩するにも自動車がいるお国柄だけに、どうしても“足”が必要になつてくる。自分の家の車を使うと親の目がうるさい。そこでカツバライがはじまる。盗んだ車にグループが集まり、人のいない郊外で思う存分騒ぐのである。もちろん桃色遊戯などお手のものだ。そして自動車が不必要になると道路端に捨てておいたり、ときには引つくり返して火をつける悪辣なものもある。

また黒人少年が白人に対して人種的ウツプンを晴らす最も適当なものは“高級車”である。白人よりもすばらしい自動車をカツバラツて乗り回しフリウェイを猛スピードで突走ると、日頃の劣等感など忘れらしい。このように車と非行は切り離すことができない関係である。

>>> きびしい躰け <<<

ロスアンゼルスからニューヨークまで、大陸横断はバスを利用した。料金は80ドル。ジグザグのコースで途中下車を何度しても料金には変わらない。2階つき、トイレつきの“グレイ・ハウンド”の長距離バスはとても快適だった。時速120Kmのスピードで、一直線の道路が2時間も3時間もつづく。

大陸の広大さが否応なしにみせつけられる。車窓からは都会や田舎、あらゆる姿のアメリカが見られ、また乗客も州を変える毎に入れ替り、すぐに友達になつた。

西部から南部へ、そして中部へとバス旅行をつづけた。コロラド州デンバーでは、バスの中で知り合つた日系人の紹介で、中塚さんという日本人

の家庭に招かれた。この中塚さんは60を過ぎた老人で、息子がシカゴのある会社で重役をしているため、現在は隠居の身である。その主人が中心となつて開いてくれた夕食会には、デンバー在住の日系人が多数集まつた。食後、2世、3世の若い娘さん4人がドライブに誘つてくれた。顔を見ればまつたくの日本人であるが、喋る言葉やゼスチュアは純アメリカ的。一諸にいても妙な感じがする。

彼女らは大学生と高校生で、話も自然学校生活のことが中心になつた。

アメリカ人の家庭は、友人や親類などの家族同志でよくパーティを開く。パーティは大体夜8時頃から開かれるのであるが、そんな時、小学生以下の子供達は留守番役である。子どもに対するしつけはかなり厳しく、夜間外出はほとんど許さない。親達は子供に留守番させるのが不安な場合、学生アルバイトを求む。彼ら学生にとつても一番人気のあるアルバイトである。普通8時ごろから2、3時間、留守番をするかたわら子供達の話相手になり、親が帰宅するまでにちゃんと寝かせておく。1時間1ドル50セントというのが相場のようなのだ。

また中流家庭の子供は、ほとんどボーイスカウトやガールスカウトに加入し、夏休みはキャンプ旅行に出かける。ボーイスカウトやガールスカウトに入らない小さな子供達は、地域のお母さん達が組織してつくっている「ブラウニーズ」に参加する。これは日本でいう子供会のようなもので、昼間、時間に余裕をもつ母親達が近所の子供を集め、絵を書かせたり、工作をさせたりしている。こんな子供達の中には、不在家庭児童もたくさん含まれている。とくに感心したのは、単に図画や工作ばかりさせるのではなく、世界各国からアメリカに留学している学生を連れてきて、その国々

の歴史や生活の模様を子供達に聞かせていることだつた。

中学生の社交ダンスも流行していた。日本式に考えると、想像にも及ばないが、当の中学生達はすまして踊っている。ワルツやタンゴなど大人顔まけの立派なターンをしている。これは子供達がセックスに対して変な興味を抱く前から、男女間の正しいマナーを身につけさせようとするもので、ホールの隅には両親がちゃんと付添っていた。

このような大人達の思いやりがニューヨークの玉突き場でも見受けられた。

私は2週間かかつて途中下車しながらのバス旅行を終え、ニューヨークのYMCAに落ちついた。2日間、疲れを癒すために外出もせず、じつと部屋にとじこもつて寝てばかりいた。3日目の昼、元気の出たところで7番街の裏通りを歩いてみた。そして玉突き場に入つた。タバコの煙でむせかえるような場内には、ヒッピー族のような若者もいづばいいた。お世辞にもよい雰囲気とは言えなかつた。

私が入ると、5、6人の少年が振り返り、愛想よくウインクした。しばらくするとデブブリふとつた2人の女性と1人の男性がつづいて入つてきた。3人共年輩である。そして一見して10代と見える少年達のグループに近づき、何やら喋りはじめた。何気なしに傍に寄り会話を聞いてみると玉突きはYMCAでやりなさい、というようなことをさかんに言っていた。

私の泊つていたYMCAにも2階に玉突き台が4台置いてあつた。「玉つきしたらあかん……。何々したらあかん……。」と遊び自体を頭から悪いと決めつけるのではなく、YMCAのような健全な場所に、青少年の興味をひく施設をつくり、悪い環境から遠ざけようとしているのである。この3人の大人はボランティアの青少年指導員であつた。

>>> ヨーロッパ入り <<<

カナダで3日程道草を食い、大西洋をこえてヨーロッパ入りしたのは8月9日だった。最初の訪問国がイギリス。それからフランス、ベルギー、オランダ、西ドイツ、北欧……へと目に映つたのが青少年のリュック姿であつた。ロンドンの鉄道駅へ行くと、フランスやオランダ行の列車を待つ若者が溢れていた。“さすが青少年活動の盛んなヨーロッパだけあるな”とつくづく感心した。

ヨーロッパの若者達の大半は、夏になると旅に出る。イギリスからスウェーデンへ、ドイツからスペインへ、フランスからイタリアへと各国の青少年の大移動がはじまる。旅を通して、その国の歴史を知り、文化を知り、そして創造と秩序の精神を養うわけである。

したがって西ドイツをはじめヨーロッパ諸国のほとんどは、青少年のための宿泊施設をいたるところに完備している。安い料金で清潔な設備。日本でも昔の諺に「かわいい子には旅をさせろ」というのがあるが、ヨーロッパの国々ではどこへ行つてもそのムードが漂っている。

青少年の宿泊施設で最も組織化されているのがユースホステルである。国によつて呼び名が違うが、システムはほとんど同じである。この運動の発祥地であるドイツでは、都会はもちろんのことへんびな片田舎でも、立派なユースホステルが点在している。このユースホステルを利用して見学旅行をしている児童達の姿は多い。学校の先生がリーダーとなつて2、3泊から長いときには1週間位の日程を組んでいる。ときには徒歩で、ときには乗物にのり、多数になればバスを借り切る。昼は土地の文化施設を見学、夜になるとゲームやソングのプログラムで、見ていても楽しくなってくる。ユースホステル内では規則が厳しく、消灯

時間の10時になると先生も生徒も一斉に就寝する。食事や掃除などもセルフサービスで、知らず知らずのうちに躰けがなされる。宿泊料は年令別にわけられ、小学生程度だと日本円で80円余りである。またユースホステル利用者には、その都市の博物館や美術館など文化施設の入場は割引きされる。

ロンドンから汽車にのりバリーに到着すると早速自転車を1台買った。値段は880フラン、約2万円である。折角ここまでやつてきたのだから、都会ばかりじゃなく、田舎も訪れてみようと思つたからだ。

地図を買い求め、フランスからベルギーに入りオランダ、西ドイツへと、コースを練つた。正直にいつてこの自転車旅行が何日かかるのか予想がつかなくつた。途中で雨でも降つたら、野原でパンクでもしたら、病気になるたら、と全然未知の土地であり、しかも言葉が通じないだけに不分は募るばかりだった。

>>> 自転車旅行 <<<

8月14日の朝、パリを出た。見送り人はたつた1人、パリYMCAのフランス青年が“頑張れよ”といわんばかりに私の肩をたたいて励ましてくれた。ベタルを踏む毎にパリ市内から速ざかり人家がまばらになつてくる。2時間程走りつづけると飛行場に出た。そして飛行場を過ぎると、もうまつたくの田舎になる。時々ヒッチハイクの若者に会おう。お互いに手を振りながら会釈する。

ヨーロッパではヒッチハイクがたいへん流行していた。道路端で立ち、自分の行先を書いた大きな紙を掲げながら手を上げている。同じ方向に行く自動車があれば乗せてもらうわけだ。相互扶助の精神というか、自動車を運転している人達も快

よく乗せてくれる。

だから全然交通費なしにヨーロッパ一周もたやすいことである。

しかし困ったことには、このヒッチハイクを利用に悪事をはたらく少年達が少なくない。ヒッチハイカーをよそおい、人家の少なくなつたところで金品を奪つたり、ときには自動車をかつばらう。いわゆる自動車強盗だ。それもフランスやイタリアが多いらしい。頭を痛めたフランスの警察当局も「夜間のヒッチハイカーは乗せないように」と呼びかけたという。

ベルギーのブラッセルに着いたのはパリを出てから6日目だった。フランス北部の丘陵地帯には泣かされどうしであつた。登つては下り、登つては下り、とうとうヒザの関節をいため最後には自転車を押して歩いた。

ブラッセルのユースホテルで休養を兼ね数日間程滞在しようと思つていた。ところが2日目の朝食のとき、隣りのベッドで寝ていたドイツ人の青年が話しかけてきた。

「どこから来た。東からじゃないか？」

少し奥目で上背のあるこの青年はカタコトの英語で聞いてきた。

「東洋の日本だよ」

と答える。彼は大きくなずいて手を差しのべてきた。お互いにカタコトの英語なのでかえつてよく意味が通じた。

テーブルに座つて2人で話していると、皆は興味ありげな顔をして周囲に集まつてくる。7、8人が私達2人の会話を熱心に聞いている。よほど日本人が珍しいのだろう。

「学生か」とたずねてみると

「20才だ。アビトゥーア（高校卒業資格のこと）を取つたから9月から大学へ進むんだ」

得意気な顔をして喋り出した。最初見た時同じ

年ぐらいかなと思つていたが、意外にも若かつた。彼は私と同じようにやはり自転車旅行中で、ベルギーのアントワープから西ドイツへ戻るという。高校卒業資格を取ると、自分の好む大学へ自由に入れる。

小学校では原則として宿題を出さず、余暇をスポーツに費し、体力の増進を計つている。ユースホテルに泊つていても、フランス人とドイツ人が隣同士の近い国でありながら、体格やタイプが違うのは案外こんなところに原因があるのではないだろうか、ふと考えた。フランスでは宿題が多く入学試験もあり、スポーツに専念する青少年が少ない。刹那的な少年犯罪が増加しているという事実を含め、何かしら日本と似かよつたところがあるように思えた。

奥目のドイツ青年は「明朝アントワープに向うがぜひ一緒に行こう」としきりに誘つたので、結局、予定していた数日間の休養をあきらめ、痛いヒザをがまんしながらベダルを踏み、ブラッセルを後にした。

>>> 秘密クラブ <<<

9月中旬のデンマークは寒かつた。西ドイツで買ったジャンパーを着ていても、朝晩は相当に冷えこみ、そして震えた。

首都コペンハーゲンには観光客で夜遅くまでにぎわつていた。市役所前から東に入つたところに丁度心斎橋筋のような繁華街がある。喉がかわいたのでビールを飲み、酒場から出てきた時、17、8歳のビートルズスタイルの少年と目が合つた。彼の方も興味ありげな顔をしていたので、ちよつと会釈して笑つてやると、ニコニコして近づいてきた。

「あなたは英語が話せるか、それともドイツ、フ

ランス？」

左手をズボンのポケットに入れ、右手をさかんに動かしながら流暢な英語で話しかけてきた。

「英語が少しだけ……」

と答えると、急に親しげな表情になり、一緒に歩かないかといわんばかりに親指を出して合図した。

「あなたは中国人か」

「日本人だよ。デンマークに遊びにきたんだが友達がいらないんだよ。君たちの友人を紹介してくれるか」

「……………」

意味が通じなかつたのか妙な顔して返事をしなかつた。繁華街と一緒に歩き、はずれにある三角公園のベンチで日本のことなど喋っていたあと、彼は急に立ち上がり、「オレ達の仲間が集まつているところに連れていつてやろう」

と言いだした。

彼の案内してくれた場所は、その三角公園から五分ほど歩いたところであつた。

さきほどの繁華街と違つて、人通りはほとんどなかつた。両側の商店はすでに閉められてあり、街灯の光が寒々とした路面に反射していた。

時計を見ると11時10分。

食料品店と思われる店の前で彼は立止つた。シャッターの下りた入口の横に2階へ通じる階段が見えた。その階段を登り切つたところにドアがあり、私たちの足音を聞いたのか1人の青年が顔を出した。

黒つばい背広をきちんと着たこの青年は、金髪にブルーの瞳でなかなかの美男子である。

ビートルズスタイルの少年が二こと三こと何やら喋っていたが、中へ入れと合図した。5坪ほどの部屋はうす暗く、ムード音楽に合わせながら、17、8人の男女が踊っていた。踊っているというより

も、ビツタリ抱き合つて揺れているといつたほうが的確である。少年は黒い背広の青年に6クロネを支払つていた。日本円にして約300円だ。部屋の周りには、まだ5、6人の男女が立つていた。少年は得意そうな顔をして彼等の中に入り、私の方を指さしながら話している。

日本人の友達だといつて自慢している様子だつた。この秘密の集まりはよく開かれるらしかつた。世話人が会費をとり、集まつて来る若者達も口づたえに聞いてくるらしい。

普通は午前2時頃までダンスがつづけられ、ラストまで踊つたあとカップル同士が深夜の街に消えていく。

しかしその大半が当日知り合つた者ばかりである。私も午前1時過ぎまでその場所にいた。

またスエーデンでは、夜9時頃になるとたくさんハイティーンの女の子が公園へやつてくる。そして彼女らがベンチに座つていると次々と自動車に乗つた少年が現われ、公園の周囲をグルグル走りだす。そのうちに各ベンチの前に自動車を止め、女の子を乗せると暗闇に消えていく。

北欧の親たちも、こうした無軌道な10代にお手上げの状態だつた。

(OB会会長)

